

# 触媒懇談会ニュース

触媒学会シニア懇談会

## 触媒討論会の思い出 1

土屋 晋

昔は、学会で、発表者の講演が終わると、座長が聴衆を見渡して、「ただいまのご講演に、何かご質問はございませんか？」と問い、挙手がないと、発表者に向かって「有り難うございました。では次に移ります。次のご講演は、・・・」と次の講演に進むか、ちょっと座長が、おぞなりの質問をして、その後次の講演に進むのが普通だったそうだ。質問が出るのは極めて希なことであり、討論が飛び交うことは、まずなかったそうだ。

ご講演は、恭しく拝聴するものであり、質問は疑問を挟むことで、畏れ多いこととされていたのかもしれない。確かに、私の院生のころ出席した日本化学会の年会は、まさにそのスタイルであった。

「それではいけない」と考えた人達（主として触媒研究者達だった）が盛んに討論するというスタイルの発表をする学会を提案し、始まったのが触媒討論会だと聞いている。そして何度かの討論会を重ねているうちに、学会設立の機運が熟成され、その結果触媒学会が発足したのだそうだ。つまり化学系討論会の嚆矢は触媒討論会であり、触媒学会は当初から盛んに討論する学会だったのだ。

私をはじめで参加したのは大学院生のときで、1961年頃の学会であった。初期の触媒討論会では、次々と質問が出て、質疑の応酬や活発な討論があったが、時間を理由に打ち切られることはなく、質問等がなく

なるまで続けられた、と聞いている。私の参加した初期の頃の討論会でも、座長が、

「予定の用意していた時間は過ぎましたが、重要な討論が続いていますので、質問は打ち切らずに続けます。ほかにご発言はございませんか？」といわれたことがあったのを、記憶している。とにかく活発な学会であった。

「これが、本当の学会のあるべき姿なのだ」と理解し、その末席を穢していることに誇りを感じたものだった。しかし、残念ながら質問の内容はあまり深くは理解できなかった。それで、「これではいけない。もっと勉強しよう」と肝に銘じたことだった。

ある討論会の時の事であった。東大の牧島象二教授が表層反応説を提唱され、それに関する研究を発表された。当時は「触媒上に吸着した分子や原子が反応して生成物になる」というのが広く受け入れられた考えであった。ところが表層反応説では、「吸着分子や原子は表面上のみならず、触媒内部までも入り込み得て、表面近くには、「表層ともいうべき層」を形成する。そしてその層に存在する原子等が反応する」というものであった。これは当時においては、画期的な新しい考えであり、提唱した牧島教授は、質問、批判の集中砲火を浴びた。

「学会とは凄いいところだ。東大教授が吊し上げにされている」と、私は驚きをもって眺めていた。

学部学生の時受講した「電気化学」の授業で、私は「牧島の理論」というのを習っていたので、牧島教授の名前は記憶にあったし、また偉い先生だろうと思っていたので、とても驚いた。でも一方では、

「これが科学の学会というものの姿なのか」と納得した。

さらに驚いたのは、会場に居られた大学院生らしい若い方が発言を求めて、教授の援護発言をされたことであった。あとでその方は、牧島研究室の院生と聞き、

「教授の弁護を学生がしている。学会とは何と、まあ、凄いところなんだ」

とますます驚いた。そのとき援護的弁護に立った学生は、当時院生だった斉藤泰和さんであった。

休憩になって、思い出したことは、

「それでも地球は動く」

というガリレオの言葉であった。

「ガリレオの時代に比べれば、現在は何と自由に発言できることか。これが学問のあるべき姿なのだろう」と納得した。そして、心から、

「学問研究の世界に進んで良かった」と思った。

しかし、後日人文系の院生の友人と話す機会があり、遠回しに学会の様子を伺ったところ、

「大家の意見に異を唱えることなど、とてもできないよ。討論など考えられないよ」と言うことだった。今は、たぶん状況は違うと思うが、そのときは、

「自然科学の分野に進んで本当によかった」

と、しみじみ思ったことだった。